

手賀沼が海だった頃

創刊号

地域の歴史や自然を皆で語ろう

2000・9・1

手賀沼と松ヶ崎城の歴史を考える会会報

「地域の歴史を楽しもう」と昨年9月に設立

「これまででは？ そしてこれから？」

「ふるさと」再発見へ 保存にも協力を

会長 川上 利男

身近な歴史にこれほど多くの方が関心を持っておられたことに驚かされると同時に、なぜかホットした一年でありました。

世界史、日本史が先行し、地方史、郷土史が疎かにされがちで、地域史に至っては一部の研究者のみというの、入試偏重のせいでしょうか、明治以来の西洋重視のせいでしょうか。いずれにしても、松ヶ崎

この一年の活動を通して、史跡の保存についても色々と考えさせられました。幸いにも、松ヶ崎城は自



シンポジウムの記録をまとめた『手賀沼が海だった頃』。今年7月に出版

然のままに残されておりません。これは、先人達の御苦労によるところが多いと聞いていますが、所有者の方々が、今日まで残して下さいたことに感謝したいと思えます。

史跡を残すということは、所有者にとっても、行政にとっても大変な苦勞が伴い

ます。しかし、一度破壊されれば、残るのは記録だけではありませぬ。

このような中で、私達に保存のために協力できることは何かも真剣に考えなければならぬと思います。

二年目を迎え、共に考えて楽しみたいと思います。

松ヶ崎城と地域研究の今後の課題

顧問 鈴木 英夫

昨年六月のシンポジウム「手賀沼が海だった頃」の刊行によって松ヶ崎の研究は大きく前進したと思っております。また、それに比例して新たな疑問が生まれてきました。課題別に大別すると松ヶ崎城、千拓後の江戸時代の水上交通、不動産に関する事になります。

松ヶ崎城については建築物が一つ、つまり、土塁の中だけだったのか、あるいは

その外部の腰ぐるわにも建築物があったのかが問題になります。最終的には発掘を待たなければなりません。根小屋など城に関連した地名がないのかどうか調べることはできます。あわせて聞き取り調査によって城の東側あるいは北側に船着場があったとの伝承があることがわかりました。その裏づけを取る必要があります。

江戸時代に関しては松ヶ崎周辺の千拓後にも松ヶ崎住民が水上交通に関与して我孫子宿に訴えられた事件がありました。これに関しての伝承の採取、そして他に文献資料が残っているかどうかを調べるのは急務だと思えます。

絵馬については年代の特定や奉納者の確定、さらには最新のコンピュータの技術を駆使して、当時のこの地域の暮らしを再現することが楽しみな仕事としてとっております。

最後は難しい注文ですが、周辺の中馬場遺跡、古代の東海道との関連を明確にすることです。当然なことですが、松ヶ崎城は周辺の遺跡と切り離すことはできません。以上簡単に今後の課題を指摘しましたが、この地域は人間による開発がどのような意味を持つのかを検証する上では資料に恵まれていますので、その利点を生かしていくべきだと思います。

活動 記録

歴史シンポジウム「手賀沼が海だった頃―松ヶ崎城と中世の柏北域」

平成十一年六月十三日
会顧問・鈴木英夫さんを
コーディネーターに、遠山
成一さん・川尻秋生さん・鈴
木哲雄さん・中山文人さん
が講師となりシンポジウム
を開催した。周辺の人だけ
でなく県各地からの参加も
多く、研究者・一般あわせて
七十人が会場に集まった。
記録は本として今年七月に
出版。(柏中央公民館)



会発足

九月二十六日

柏駅東口近くの会議室に
市民有志十人が集まり、会
を正式に発足した。
松ヶ崎城現地見学会

十月十六日

松ヶ崎城から北柏ふるさ
と公園まで、鈴木さんの説
明を聞きながら歩いた。参
加者は五十人。予想を超え
る人数に資料が足らず、ス
タッフが二度コピーに走っ
たほど。木々の間から見え
る台地下の風景に、「昔はこ
の下まで海があったのね」
と見学者の一人。
松ヶ崎城内の清掃

十月三十日

柏中央高校の生徒も参加
してくれ約十五人で敷地内
一帯を清掃。若い力が大活
躍。集めたごみは市が回収
してくれた。

絵馬の絵解き

平成十二年一月十五日

松ヶ崎城の一角にあった
松ヶ崎不動尊と奉納された
絵馬が火事で全焼したのは
平成八年。その絵馬の中の
「不動尊風景図」「不動尊参
拜図」に、かつての松ヶ崎周
辺が描かれているのを見つ

け、パソコンで再現した。ス
クリーンに映し出された明
治初期の風景を見ながら、
何が描かれているか、皆で
意見を出し合った。「この人
物は人力車を引いている。
赤い部分は毛氈(もうせん)
に違いない」「この人影は棒
手振(ぼてふり)だろう。棒
の先に荷物を下げている」。
参加者も一緒に絵解きに会
場は盛り上がった。(スタジオ
オ・ウー)

高田さん講演会「柏・松ヶ
崎と古代の東海道」
一月二十九日

「柏市史 原始・古代・中
世編」に、「柏に古代東海道
が通っていた」と新説を発
表した高田淳さんの講演会
(三ページに要旨掲載)。参
加者は五十人で「ルートを一
度歩いてみたい」と感想
を話す人も多く、今年秋に
その企画が実現。(柏中央公
民館)

松ヶ崎城現地見学会
三月五日

現地見学会の二回目で、
松ヶ崎城近辺を歩いた。参
加者は三十五人。冬場で草

が枯れ、堀・土塁の様子が
はつきり観察できた。「これ
は野ウサギのフンかな」「こ
れはタラの木」。動植物の話
も出て、「松ヶ崎城は史跡だ
けでなく、自然がたくさん
残っている」との声も。



第一回総会

四月十六日

会設立後、初めての総会
に会員三十六人が出席した。
松ヶ崎城のビデオ上映後、
総会、懇親会を開いた。総会
では、平成十一年度決算、平
成十二年度事業計画・予算
が報告され承認された。(松
葉近隣センター)

五月十一日

木原啓吉さんを囲む会
「開発するしたら、松ヶ

崎城のどこを保存すべきか」という問い合わせが、ある
経営コンサルトから会へ
入った。「松ヶ崎城の開発に
対して、会としては何がで
きるか、どうすべきか」を考
えるために、社団法人日本
ナショナル・トラスト協会
副会長・江戸川大学教授の
木原啓吉さんを招いて話を
聞いた。ナショナル・トラス
トとは自然と歴史的環境を
守る住民運動で、その考え
方や手法は民間・公的機関
を問わず、日本に根付きつ
つある。(スタジオ・ウー)

出版記念講演会・パ
ーティー
七月二日

本「手賀沼が海だった頃
―松ヶ崎城と中世の柏北域」
が完成し、その記念の講演
会とパーティーを開いた。
講演会では、遠山成一さん
が「房総の中世城館跡と
松ヶ崎城跡」、鈴木さんが
「松ヶ崎のあゆみ―江戸時代
以後の松ヶ崎城址」と題し、
それぞれ講演。パーティー
は近隣の地方史家らの参加
もあり、盛況裡に幕を閉じ
た。(スタジオ・ウー)

松ヶ崎城内の
弘法大師像が
破損・盗難

松ヶ崎城内の敷地にまつ
られていた弘法大師像が、
平成十一年十二月に壊され
一部盗難にあった。「約二百
二十年くらい前のもの。現
在は行われていないが、か
つての三郡地域にあった札
所の一つだったのではない
か」と地元の人には説明する。
石仏の首から上と、「第四十
五番」と刻まれた台座がな
くなり、「賭け事に関係した
盗難かもしれない」と話す
人もいた。犯人はつかまっ
ていない。この弘法大師は、
正月には地元の人が必要お
参りする場所の一つ。一日
も早い解決、石仏の復元を
祈りたい。



首から上と台座が盗まれた弘法大師像

高田淳さん・講演記録（要旨）

『柏・松ヶ崎と』

古代の東海道』

平成12年1月29日

柏中央公民館

古代の東海道はこの地域のどこを通り、菫津駅は現在のどこにあったか。これまで諸説あったが、平成九年発行の「柏市史 原始・古代・中世編」で高田さんは「東海道は柏市南部を通り、菫津は藤心にあった」と新説を発表した。

● 古代の道（官道）とは

東海道といえは、近世（江戸時代）のイメージがあるが、古代の道路体系は全く異なる。都から地方の六方向へ伸びる道が基本体系。東へ向かう東海道・東山道・北陸道、西へ向かう山陰道・山陽道・南海道と、山陽道終点の大宰府から循環する西海道がある。以上七つを「七道」という。

古代の道は「情報を伝達する」という重要な役割を担う。手紙を持った使者が馬で走り情報を伝える。中央政府の意思を地方へ、逆に地方で問題が生じた時には、すみやかにその状況が伝えられる。情報をできるだけ速く伝達するために、いくつかの条件を整備する必要がある、それが古代の道の特徴になっている。一つは目的地から目的地を最短距離で結ぶこと。集落間を結ぶ生活道は別にあるが、都からの道は直線状に敷かれた。平らではないので単純な直線とはいかないが、数キロメートルもまっすぐだった例もあり、地形が許す限り直線という印象を受ける。

もう一つの特徴は、「駅」が置かれたこと。三十里（約十

六キロメートル）おきに、宿泊ができ、乗り換え用の馬や食料が用意された駅があった。さらに、この道は大変広い幅員を持つ。非常事態に大量の軍隊を迅速に送り込むためと思われ、六〜十二メートル幅の堂々とした道だった。

● 東海道の特徴

東海道には大きな変遷が四回あった。その四回目の変更が平安時代の初め（西暦八〇〇年頃）で、下総国府（市川市）から常陸国府（茨城県石岡市）へまっすぐにつながるルートが開かれた。この時点で東海道と柏地域との関わりがでてくる。このルート上で、柏付近に想定される駅は、「菫津」と「於賦」。下総から常陸にかけての地域の特徴は、非常に大きな内水面があったこと。いわゆる「香取の海」が広がっていた。「水上がだめなら陸上、陸上が使えない時は水上」という水陸二本だての交通が必要だったと思う。菫津駅の「津」は「港」の意味。陸上交通の駅でありながら「津」がつくものは、全国で九カ所あり、そうした駅は水陸交通の機能を併せ持ち水辺に立地していたと思われる。

● 柏近辺の推定ルート

市川・国府台（下総国府）―松戸・金ヶ作丁字路（常盤平駅の北）―柏・南増尾―藤心（菫津駅を想定）―東台二丁目（柏市街地）―柏下・柏文化会館のある谷（手賀沼のほとり）―手賀沼―我孫子・根戸

〔国府台から金ヶ作丁字路まで〕 市川市の新山遺跡や国府台遺跡で古代の道路が検出されているので、途中までは古代の道路が確実にあったといえる。このラインの一部は市川と松戸の市境に重なる。金ヶ作丁字路の東側に、自動車道に平行した形で、人しか歩けないような道が約五百メートル残る。古代の道は非常に幅広いが、そうした道が廃れた場合、両端が平行する二本の細い道として残ることがある。ここも東山道武蔵路に推定される埼玉県所沢・狭山市境の状況と非常によく似ていると感じた。

〔南増尾・藤心まで〕 南増尾に「右太道」「左太道」「道

向」という字が残る。いつの時代の大道かはわからないが、古代の道沿いに大道という地名が残る例は他にもある。また、このルートには約二キロの直線状の部分がある。

〔藤心に菫津駅〕 ずっと台地上を走ってきた道路が、手賀沼と直結する谷に、いわゆる香取の海の水系に初めて出る地点。津の機能を持った駅の場所にふさわしく、私はこの藤心に菫津駅を想定した。「津戸口」という字や大きな津という大津川の名も、香取の海への津だったことを物語っているのではなからうか。

〔手賀沼のほとりまで〕 広幡八幡宮の東側道路、閑場町から東二丁目に至る道、柏第五小学校の南側の道路などまっすぐで、古代の道らしい特徴がみえる。

〔手賀沼から我孫子台地へ〕 手賀沼の入口には堤防状のものを築き、その上に道路を走らせたのではない。最後の部分は橋かもしれない。このルートの延長線上、手賀沼対岸の根戸に、直線的に台地をあげるルートが存在した。小丘陵をまっすぐに登る道で、古代の造作と感ずる。

● 中世の交通路と松ヶ崎

柏市域では古代の道は南を通り、中世になると手賀沼北岸から松戸に抜ける北のルートが使われたと思われる。市川の下総国府が機能を失ったため、わざわざ市川まで南下する必要がなくなったからではなからうか。ただ、南側ルートもまっすぐにならなかったわけではない。この南と北のルートが交差する所に、松ヶ崎や根戸が位置する。この地域は、陸上交通の南ルート・北ルートと香取の海の水路上ルートという三つが合わさった、非常に重要度の高い地域と思う。重要度が高いからこそ、相馬御厨の候補地らしき大規模な集落が生まれ、中世には城が築かれる。松ヶ崎の名前が中世に出てくる意味も、そこにある。

*東海道を歩くイベント、高田さんも講演する市主催の講演会が秋にそれぞれ開催。日時は六面に掲載

「貴会の今後へ」

「手賀沼が海だった頃—松ヶ崎城と
中世の柏北域—」出版に寄せて

松葉町在住

岡本光男

はじめに

松戸市にある「牧の原」団地から、柏市の「松葉町」（北柏ライフトアウン）一団地に移り住んで十八年になります。たぐさんの人達の交わりを通して柏市の街の様子が徐々にわかってきました。もうすっかり柏の住民になりました。そうこうしているうちに「松ヶ崎」城のことを知りました。松葉町団地に住んで間もなく、北柏ライフトアウン軟式テニスクラブに入部し、そのクラブの男澤暎雅（東急団地・大林組）さんや加来伸一郎（日本統計センター）、渥美勝利（大林組）、水島義隆（石油化学工業協会）、森下甲子弘（建設技術インタナショナル）、友人の室山文夫（松ヶ崎・都庁）さんなどと「松ヶ崎」城と手賀沼のことを調べようということになり、何回か研究会を開催しました。さらに「松ヶ崎」城や「根戸」城、我孫子市にあると言われている「鎌倉」街道にも足を運びました。オブザーバーとして橋本茂男（松ヶ崎・前田建設）さんも加わり、「松ヶ崎」城の測量や穴掘りなどのときには手伝うよう、と言ってくれました。

一、地域の歴史について

今回出版された「手賀沼が海だった頃」（「松ヶ崎城と中世の柏北域」）は、聞くところによると多くの人達の参加と協力のもとに書かれ、地域の歴史を知りたいという人々の欲

求と活動の高まりに応えたもので、時宜になつてきているといえます。本書は、柏市の「松ヶ崎」城と「手賀沼」というごく限られた場所と時代をクローズアップしたのですが、柏市の中で市民参加の歴史研究に、新たな一ページを開いたものといえましょう。

本書に即していえば、市民の科学的な歴史認識と実証的研究の上に、おおいに役に立っただろうと思っています。

二、「松ヶ崎」城と手賀沼の見学大会

本書は、同名の二回にわたるシンポジウムの開催が大きな役割を果たしているものと思われまふ。この間に、「松ヶ崎」城の見学が県立柏中央高校教諭（千葉大学文学部講師）の鈴木英夫先生の案内によつて開催されました。私もその見学会に参加しました。

そのときに鈴木先生の説明の中で印象に残っていることが二つありました。その一つは、「松ヶ崎」城の縄張りの中で人工的に作られた高田側の崖の切りこみが後北条氏の造作に似ているために、この城が後北条氏と関係があつたのではないだろうかということ。二つ目は、旧手賀沼が「松ヶ崎」城の舌状台地から現オークスの辺までできていたのではないだろうかということ。

あらためて手賀沼が古い時代には大きくしかも自然の恵み豊かな澄んでいた沼であつたことがわかりました。しかし現在手賀沼は日本の中で一番汚くその汚名に甘んじていることに怒りを覚えるとともに、本書に見られるように手賀沼が歴史的な沼であることに誇りを持ち、市民憩いの場として自然の再生を願うものです。

三、本書の意義

歴史研究者および多くの人達の参加と協力によつて、地域の歴史研究が学問的に理論的に実証的に深められていくことが必要で、おおいに期待をしているところです。そうした中

で以下のことについて述べられてはおりますが、さらに検討していただければ幸いに思います。

①中世において、物資の輸送は河川と沼、海上を利用した船の役割が大きな比重を示すものと思われまふ。流通経済の面から見ると河川と海の利用と結びつきがさらに時代ごとに検討されて行くべきものと思われまふ。

②古東海道および鎌倉街道、一般道路の解明。

③板碑、宝きょう印塔などの石造遺物と城館跡および神社やお寺の時代的解明と地域的な紐帯、陶磁器や古銭などの埋蔵文化財の調査と発掘。

④中世の村落形態と中世武士の主従関係。

⑤農民や漁業、職業集団（渡来人をも含む）。

⑥地名からの考察。

⑦コンピュータによる地理的考察と分析。

等々、項目を思いつくまま羅列致しましたが、本書の課題解決に向け、さらにこれらの研究分野からも実証的に深められていくことができたと思つていきます。

おわりに

最後になりますが、「柏市史」（原始・古代・中世編）と比較して、本書が学問的に見て、新しい問題意識に立っているのかどうか、あるいは何か新しい事実が発見されたのかどうか、検討課題は何か、知りたいと思つていきます。

（歴史学研究について）石母田正先生（法政大学名誉教授）は「中世的世界の形成」（岩波文庫）の中で、「遺

された歯の一片から死滅した過去の動物の全体を復元して見せる古生物学者の大胆さが必要である。この大胆さは歴史学に必要な精神である。しかし、資料の導くところにしたがつて事物の連関を思案にたどつてゆく対象への沈潜と従来の学問上の達成・・・」ということを述べています。

本書の出版をもとに、さらに文献学的史料批判と考古学的資料批判を通し、柏北域の中世を解明してほしいと思つてい

菫津の地名の由来は？

高田淳さんが講演の中で、西津の地名の由来を話した。「西津の津は港だが、菫は朝廷の四・五位の衣装を緋色に染めた染料のアカネグサでは、『延喜式』に、常陸国の税としてアカネが記されている。常陸国から

舟に積まれたアカネが、香取の海を経て運び上げられた津が西津。その後陸路で都へ運搬されたのではなからうか。それに對し「アカ・ネでは、アカは関東ローム層の赤土で、ネ(根)は“ねっこ”、おおもとの意。赤土が露出していた地形的・地質的特徴が地名になったと思

う」と会場の長沼映夫さんから意見が出た。また後日、来場していた郷土教育全国協議会会員・柴田弘武さんから、「菫について、このよ

うな資料もあります」と手紙が届いた。「古代地名語源辞典」(東京堂出版)の「西部(あかなべ)」の項についての説明だ。

「西部は、染色を中心とした職業部に由来する地名と思われるが、(中略)地形地名として考えれば、アカ(高地、台地)・ノ(助詞)・へ(あたり)で、「台地の一部」ほどの意とならうか。」

果たして、西津の地名の由来は？ 他のお考えがあれば編集部宛お知らせ下さい。

ふるさと

原風景(1)

記憶に残るのは、木崎から見た松ヶ崎の早春の風景でしょうか。国道六号線のバス停「松ヶ崎入口」から、松ヶ崎に入る道があるでしょう。その道を柏方面から戻ると、木崎橋の前あたりで突然視界が開け、集落全体が見渡せるんです。

重なった三つの丘とか台地を遠景に、大堀や中堀と呼ばれる川が流れ、周辺には田んぼが広がっていました。早苗は淡い緑色で、ところどころに植わった川柳も芽吹きます。丘も新緑で覆われ、その中腹やふもとに、畑やわら屋根の農家

ですが、道端に白くて小さなノバラの花。今大堀川は幅広いですが、昔はそんなに広くなく、流れも一つではありませんでした。大堀は丘陵に沿い、今の木崎橋あたりは中堀という川でした。田んぼの中には「中みお」と呼ばれる、小

フナ、カニ、小エビにザコ。松ヶ崎では漁業を仕事にする人はいなかったし、一生懸命魚を捕る人もいなかったんですが、煮たりゆでて干したり、日常の食卓に魚はありました。

空気が澄んでいて、富士山も見えていました。夕焼けで空が真っ赤に染まり、太陽はちょうど富士山の裏に隠れるように沈んでいくんです。日光の方で発生するイナビカリで、随分遠くの稜線が夜空に浮かんだこともあります。ホタルもよく光っていたし。澄んだ空気や自然がなくなるなんて、当時は思ってもみなかったですね。

「大洞院は最近寺コンで知られるようになったんですよ」と住職のお話し。平親王将門開基と伝える由緒ある寺院は、曾ては花野井木戸弁天山にあった。尾井戸の字名に相応しく池や沼に囲まれ、桜を始め沢山の草木に包まれた境内は、春は百花繚乱と咲き乱れて花散る風情も美しく、地名花野井の由来となり、大洞院の山号・花井山(かせいさん)の由来ともなった。

大洞院と寺コン

曹洞宗としての開山は、第一世・鷹山舜嶽和尚で、慶長元年と伝えられ、その以前の宗派は不明である。

慶長年間には関東地方に大風雨・洪水が相次ぎ、時代は不明だが台風によって鐘楼の鐘が水没、江戸中期には火災のために伽藍の大半を焼失して、大洞院は波乱に

富む歴史を迎える。

柏市史年表に、宝暦元年七月堂宇再建の記録があるが、住職のお話しを総合すると、現在地に移って民家を譲り受けて仮本堂とし、以来本堂再建は歴代住職の悲願として引き継がれた。

平成二年十一月、二百四十年ぶりに落慶式を迎える本堂で、「記念のコンサートを開こう」と木村住職が熱望、檀家と支持者が大洞院ルネッサンス委員会を結成して、『日本フィル管弦楽四重奏+クラリネット』の演奏が実現、本堂の高い天井が絶妙の音響効果をもたらして満員の聴衆が酔った。

以来年二回、山下洋輔その他のミュージシャンが、大洞院寺コンで活躍する。



椎名道利さん

68歳。松ヶ崎に生まれ、約40年間生活する。現在は呼塚在住

が点在していました。そして、時季は少し後になりました。大きな水路もありました。大堀など、川は豊かですね。ウナギやドジョウが捕れていました。「流し針」という、竹に釣り糸を結わえてエサをつけただけのしかけを一晚置いておくと、ウナギがかかっているんです。雨の後には特に手賀沼からいろんな魚が上ってきていました。

「大洞院は最近寺コンで知られるようになったんですよ」と住職のお話し。平親王将門開基と伝える由緒ある寺院は、曾ては花野井木戸弁天山にあった。尾井戸の字名に相応しく池や沼に囲まれ、桜を始め沢山の草木に包まれた境内は、春は百花繚乱と咲き乱れて花散る風情も美しく、地名花野井の由来となり、大洞院の山号・花井山(かせいさん)の由来ともなった。

曹洞宗としての開山は、第一世・鷹山舜嶽和尚で、慶長元年と伝えられ、その以前の宗派は不明である。

慶長年間には関東地方に大風雨・洪水が相次ぎ、時代は不明だが台風によって鐘楼の鐘が水没、江戸中期には火災のために伽藍の大半を焼失して、大洞院は波乱に

富む歴史を迎える。

柏市史年表に、宝暦元年七月堂宇再建の記録があるが、住職のお話しを総合すると、現在地に移って民家を譲り受けて仮本堂とし、以来本堂再建は歴代住職の悲願として引き継がれた。

平成二年十一月、二百四十年ぶりに落慶式を迎える本堂で、「記念のコンサートを開こう」と木村住職が熱望、檀家と支持者が大洞院ルネッサンス委員会を結成して、『日本フィル管弦楽四重奏+クラリネット』の演奏が実現、本堂の高い天井が絶妙の音響効果をもたらして満員の聴衆が酔った。

以来年二回、山下洋輔その他のミュージシャンが、大洞院寺コンで活躍する。



再建された大洞院本堂

古代東海道(推定)を歩こう!

10月、11月に
ウォーキング・イベント開催



三面で紹介した古代東海道、元柏市史編さん委員の高田淳さんと一緒に、柏市域の推定ルートを歩きますか。東海道はどこを通っていたか。古代の道の面影を残すところは。そして、広い道路が廃れた後に見られる現象は。高田さんの説明を聞きながら、十月十五日(日)、十一月十二日(日)の二日間です。一日だけの参加も可。十月十五日の予定▽時間 午前九時半から午後三時(予定)▽ルート 柏市藤心(柏駅からバス)〜松戸市金ケ作

(新京成線・常盤平駅付近)。詳しくは三面参照。約六キロメートル▽集合 午前九時半 柏駅東口みどりの窓口前▽費用七百円(資料代等)、交通費・食事は各自。昼食は近くのファミリールレストランでとる予定▽申し込み 十月七日(土)まで、下記問い合わせ(雨天延期(十一月十二日)へ)。延期の場合は、当日の朝八時頃、こちらから電話。その時間で間に合わない方はお問い合わせ下さい▽申し込み・問い合わせ 0471・34・9281鈴木



会からのお知らせ

会員の皆様へ 平成十二年度会費の件

総会において、平成十二年度会費も現状の二千元に決まりました。左記まで振込み、またはイベント開催時に会計・事務局に直接お支払い下さい。▽振込み先 千葉銀行 柏支店 (ZNO88) 普通預金 3461475 (手賀沼と松ヶ崎城の歴史を考える会 伊江有可里)

会報は年三回、基本的には四ページを予定しています。会員となり、会の活動や会報発行へご支援いただけませんか。年会費一千元で、申し込みは電話・FAX・ハガキのいずれかで、ご住所・お電話番号・ファックス番号・お名前を事務局までお知らせ下さい。随時受け付け、イベント開催時でも結構です。

会報への「ご寄稿」「ご意見」をお待ちします。会報を、いろいろな方の意見やご研究の発表の場にできればと考えています。会

員であるなにかかわらず、ご意見やご寄稿をお寄せいただけますか。また、編集・入力等のパソコン作業や発送作業で、会報のお手伝いをして下さる方を募集しています。

☆ 会報問い合わせ Tel. FAX 0471・55・235 1 (浦久) ☆入会等、会への問い合わせ 事務局 〒277-0835 柏市松ヶ崎415-5、1-2006 (北) Tel. FAX 0471・31・8879 (北)、Tel. 33・6438 (松平)

本「手賀沼が海だった頃」松ヶ崎城と中世の柏北域」会・書店で販売中 当会の本「手賀沼が海だった頃」が、たけしま出版から七月に出版され、会と書店で販売している。昨年開催した歴史シンポジウムの記録を中心に、松ヶ崎城の説明、松ヶ崎周辺地域の歴史などをわかりやすくまとめた内容。会で販売すれば、売上の一部が活動費に。A5判百五十六ページ 千五百円。▽Tel. 0471・58・4512 たけしま出版、または会事務局 チャリティー・ショー

大草原の歌を聴く会

9月11日に柏で

モンゴルの楽器・馬頭琴とピアノ・ドラムの競演。大草原の歌を聴く会主催。同会は、雪で大きな被害を受けたモンゴルを支援しよう、今春音楽会を開催し、売上金を現地に届けている。馬頭琴・アマルさん、ピアノ・杉沼美由紀さん、ドラム・阿部徹さんが出演。▽九月十一日午後七時開演▽JR東口、スタジオオ・ウー▽二千五百円(飲み物付き)▽Tel. 0471・50・1263 松尾さん

高田淳さんが講演

柏市文化祭・歴史講演会

三面で紹介した高田淳さんが、柏市文化祭で講演する。「柏市史近代編」の刊行記念として開催される講演会で、二日間で四人の講師が話す予定。▽十一月四日(土)・五日(日) 午後一時三十分〜五時(時間は予定)▽柏中央公民館 ▽入場無料 ▽Tel. 0471・67・1111 文

竹島盤(いわお)さんが

北野道彦賞受賞

たけしま出版の竹島盤さんが今春、第九回北野道彦賞を受賞した。同賞は、東葛地域の文化向上に貢献した個人・団体に、毎年贈られる。竹島さんは編集者として、地域に根ざした多くの書籍を世に送り出す一方、自身でも「新形成電鉄沿線ガイド」を執筆している。菅谷孝之さんが写真担当 「広重と歩こう 東海道五十三次」出版

菅谷孝之さんが写真を担当した「広重と歩こう 東海道五十三次」が今春出版された。同書のテーマは、歌川広重の描いた、東海道宿駅と江戸・京都を合わせた浮世絵五十五枚。その絵を軸に、江戸時代の人々の生活や広重の絵の特徴、浮世絵の話などは語られている。菅谷さんは絵と同じ風景を、広重が描いたであろう視点から撮影。歴史・美術・現代の情報満載の一冊で、広重通、東海道通になれるかも。小学館発行